様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０７３６

研究課題名（和文）現代美術の教育における「抽象表現」指導の有効性と汎用化

研究課題名（英文）Universal and available programs for teaching "abstract expression" in contemporary art education

研究代表者
渡邉　美香（WATANABE, MIKA）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０５４９１００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、現代美術の一つであり、指導者にとって扱いにくいといわれる「抽象表現」の指導方法の構築を目的とし、子どもの表現と感性の育成を関連づけ、発達段階に基づき教材を開発・検討した。4年間に、小学校中学年を対象とした抽象絵画鑑賞教材の開発・検討、小学校低学年を対象とした造形材料分類表の作成、小学校高学年を対象とした海外と日本の児童の相互絵画鑑賞授業実践、中学生を対象としたマルチメディアを用いた抽象表現題材の開発・検討を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is the construction of the teaching method of “abstract expression” which is one of the contemporary art. Connecting the expression of a child with the development of child's sensibility, I examined teaching materials based on the stages of development. Results of this study for four years are as follows: (1) Developing teaching materials of an abstract picture appreciation activity for third and fourth grade elementary school students. (2) Making a classification list of art materials for first and seconds grade elementary school students. (3) Practicing interactive art class between Japan and India for fifth and sixth grade elementary school students. (4) Examining teaching materials using the multimedia for junior high school students.

研究分野：美術教育

キーワード：美術教育　抽象表現　現代美術　授業実践

１．研究開始当初の背景

美術教育では教師が自ら題材を決めることから、教師自身の美術についての広い知識・理解が問われてきた。しかし、教師の関心は体系化された古典的な美術に偏りがちで、本来私たちに身近であるはずの現代美術は、体系化・価値付けされていないため、題材として受入れられにくい現状があった。古典的な美術同様、現代美術も表現の一態度として重要な内容を含んでいる。そのため、表現科目である美術において、現代に有効な表現材料や表現の造形的意味づけを常に更新すること、教師が広く題材に接することができるよう指導方法を開発することは、美術教育研究上重要な課題である。申請者は特に現代美術の「抽象表現」に着目し、現代美術に親しめるようモダン・アートの見方と現代生活をつなぐ実技指導方法の構築を試みた。

「抽象表現」は、20 世紀初頭に西欧諸国で誕生した表現形式であるが、今では、人のものの見方や感じ方の変遷を写し出す一つの時代精神の現れとして、現代美術の一ジャンルを形成するものである。「抽象表現」は、世界の多様な考え方や文化の交流の中で、異質な価値観を包含し、自己を超える他者理解の表現として誕生した背景をもつ。実際、抽象美術作品は、「作品そのものを自由に見る」考えを基本にし、様々なコンセプトにもとづいた多種多様な表現を展開した。しかし、一般的に日本の美術教育では、それは単に具体的な形をもたないものと解釈され、曖昧で表面的な理解がなされてきた。その理由として、「抽象表現」は、その性質上、あらゆる表現のタイプを同一に把握することが困難であり、画一的な指導が難しいこと、また「抽象表現」は、現代美術史の形式主義的解釈のもと議論、評価され、作品を分類し理解する視点から論じられてきたことも挙げられる。

美術において表現指導が古典的・形式主義的に行われると、表現の持つ造形思考が見えなくなってしまう。特に、抽象作品は写実表現のように現実世界との比較を通して作家の熟達した技術を読み取る方法を持たず、一般的に作品の技術レベルが見えにくいため、技術指導が困難だと思われがちである。このような状況を踏まえ申請者は、作品の外見や技法からのみ「抽象表現」を議論するのではなく、実際に表現しようとする制作者の発想を辿り、表現を用いる制作過程を考察し、「抽象表現」の見えにくい技術の基準を見える状態に理論化することで実技指導を可能にする着想を得た。現代美術の一つのジャンルである「抽象表現」を一表現方法として理解し、教育の現場の題材に用いられるようにするため、「抽象表現」の扱い方に関する理論と実技指導方法を提示していくことを目的とし、以下の研究を行ってきた。

（１）実技制作の経験をもとに、感性の発達と表現技術の習得をすり合わせながら高次の段階（初級・中級・上級）へと進むことのできる指導内容の検討（「現代美術の教育における『抽象表現』の扱い方に関する理論と実技指導方法（１）・（２）」,『美術科研究』第 27・28 号、2010 年・2011 年発表）

（２）美術作家であり教育家であるラスロー・モホリ＝ナジ(Laszlo Moholy-Nagy:英語読み表記)の光を用いた実験と教育方法についての文献（The New Vision -with abstract of an artist 等）調査（「光を素材としたモホリ＝ナジの造形教育理論とその可能性について－現代美術の教育における抽象表現の扱い方に関する理論構築の試みとして－」,『美術教育学』第 30 号,2009 発表）

（３）アメリカの現代美術作家アグネス・マーチン(Agnes Martin)の抽象絵画を対象とした理論研究（「アグネス・マーチンの抽象表現における「静けさ」についての一考察」,『大学美術教育学会誌』第 41 号,2009 年、「アグネス・マーチンの絵画における抽象表現と精神性について－抽象表現と感性の共有をめぐって」,『美術教育研究』第 11 号,2006 年発表）

（４）写真及び光・映像を用いた「抽象表現」作品の実技制作

これらの研究より、本研究では「抽象表現」の指導方法の理論をもとに、より汎用性があり、教師に取り入れやすい指導法及び教材を検討・開発することとした。

２．研究の目的

現代美術の一つ「抽象表現」は、感性を育む美術教育に好適な題材である。しかし、研究背景でふれたように指導者にとってなかなか扱いにくい指導内容でもある。本研究の目的は、子どもたちの表現と感性の育成を関連づける美術教育において、教師が手軽に実践できる「抽象表現」の指導方法を構築し、その有効性と汎用化を検討することである。多様な他者の中で自己を再認識する方法として学校教育における「抽象表現」の指導の可能性を探り、現代美術を取り入れた教科指導方法の有効性と汎用化を検討する。

３．研究の方法

指導方法においては、学校教育現場での活用を目標に据える。「抽象表現」の扱い方に関する理論をもとに、主に初級コースの指導方法を図画工作科・美術科や他教科との関連指導内容と照らし合わせ検討する。

（１）1 年目は小学校 3，4 年生（中学年）
（２）2 年目は小学校 1，2 年生（低学年）
（３）3 年目は小学校 5，6 年生（高学年）
（４）4 年目は中学校 1～3 年生

を対象とした指導内容を検討する。その際、附属小中学校、大阪市・府下の図工・美術科研究部の教諭、海外の指導者や文化交流企画者に協力いただき、調査・実践から子どもの実態に合わせた指導用教材を作成する。指導実践を通して教材及び指導方法の有効性と汎用化の状態を検討し、それらの成果と課題

を明らかにする。

４．研究成果

（１）平成 24 年度は、小学校 3，4 年生（中学年）を対象とした抽象絵画鑑賞活動に着目した。中学年は、言語の読み・書き能力が発達する時期であり、言語を介して造形活動への意欲を高めたり、自分の作品に対する考えや他者の作品への理解を言語で表現する能力の育成が期待される。そこで、中学年の指導方法として、「アートとは何か」、「アーティストはどんな人か」を問うワークシートやパワーポイント資料を作成し、アートに関わるボキャブラリーの広がりを言語レベルでの広がりとともに実感させるような題材を検討した。まず、フィラデルフィア学区の 5 つの美術館で作成した小学校 4 年生向け鑑賞用教材『Art speaks!』のワークシート分析を行い、誰もが表現者（アーティストの卵）であることを児童一人ひとりが知り、その態度をもって制作に取り組めるよう教材を構成した。制作では、各児童が興味を持ったアートのジャンルについてイメージを広げられるよう、絵や立体に表す活動を展開し、美術館など生で作品にふれる指導も検討した。自分が作ったものを他人に分かるように言葉で説明したり、作品を比較し、議論し、アート体験について自分の考えを言葉で表現するためのワークシート教材を検討し、言語と造形活動の関連を図った。

造形活動は、言語に縛られるものではないが、言語はその社会とつながる一つの手段である。そこで、言葉をきっかけに造形世界へ入り、造形活動や作品に触れる体験から言葉を引き出す指導方法を検討した。「抽象表現」の初級コースの指導は、目的に応じた材料の扱い方を覚えるだけではなく、興味を持って手と目を使う経験から自分の見方や感じ方を発見することにある。単に色や質感、形の定義を理解することではなく、自分でそれらを発見する楽しさから見方を深め広げていくことが重要である。定義される概念を覚えるのではなく言葉が自分自身を語るツールとなるよう、言語の取得に造形表現を関連させ、表現を介した子どもの感性の育成に有効な教材を検討・開発した。

教師と美術館が連携し作成した本教材のワークシート『Art speaks!』には、4 年生での言葉能力の発達を考慮したカリキュラムに応じて、①お気に入りの作品から感じ取ったことを自分の言葉で書く活動、②テーマに沿って論理的な文章を書き、自分の考えを整理して伝える活動、の 2 つの側面があった。そこで、大阪市の小学校教諭の協力を得て抽象絵画作品の鑑賞に用い、①の活動を取り入れたワークシート 4 パターンのうちの一つを選択・改良し実際の授業で使ってもらった。具体的には、子どもたちは、絵の中に見えたもの、感じたことをワークシートの枠内に複数、単語で挙げ、それらの言葉を使って、オリジナルの詩を作った。最後に、授業実践事例から、ワークシートを用いた抽象絵画鑑賞授業の指導方法の有効性と汎用化を検討した。造形活動は言語に縛られるものではないが、図画工作科の授業において、言語は、学習者の作品の見方や感じ方を広げるツールとなる事が望まれる。ワークシートを用いた抽象絵画鑑賞では、中学年の豊かな言語能力の育成と同時に、彼らが作品をよく見、感じ取った経験をもとに自分のお気に入りの作品やテーマを発見する活動を促すことができた。これらの考察から、多様な他者の中で自己を再認識する教育の方法として、抽象絵画鑑賞授業ワークシート教材の有効性を示した。

（２）平成 25 年度は、小学校 1，2 年生（低学年）を対象に材料体験を促す材料分類表を作成した。低学年では、主に素材と身体の関わりとを重視し、子どもの思いと行動が結びつくよう身体的な発達を考慮した指導内容を検討した。材料の性質により道具の扱い方や造形活動の広がりに多様なヴァリエーションがあることを教師が理解でき、それらを授業づくりのために選択できるような材料分類表を検討した。材料としては紙、木、粘土などの従来の造形材料に加え、樹脂、金属、ガラス、光源等現代の造形に用いられるものなど小学校で実際に使われる材料 100 種類を取り上げた。現代の材料について、教師が扱えるよう、「抽象表現」の指導方法（モホリ＝ナジの理論）に基づき下記の 3 つの要素から分類した。

①構造…それ自体を成り立たせている不変のもの、紙の繊維や金属の結晶など
②テクスチャー…自然の持つ表面の表情、人の顔のしわ、表皮など
③表面相…外部的な要因によって、素材の表面に生じる変化

材料が、製品の部品のように選択されるのではなく、一つの素材がとらえ方によってさまざまな造形の可能性があることを促すべく、項目立て、作表を行った。また、抽象表現初級コースにおける材料体験の課題と成果について活動の広がりをまとめた。これらの分類表を研究室のホームページで公開し、広く図画工作・美術の教育に携わる人が自由に見ることのできるようにした。

また、平成 26 年度には、平成 25 年度に作成した小学校低学年対象の材料分類表を大阪府の小学校授業研究会において実際に配布し紹介した。大阪府下の小学校での小中一貫教育図画工作・美術科カリキュラムの研究において、材料表を活用した授業づくりがなされた。「抽象表現」の造形思考は、自分自身の発見のプロセスであると同時に多様な他者と共有するメディアの存在を浮かび上がらせるものである。材料を扱い手を加えて造形する活動の中で、子どもは、常に作っているものから受ける感覚的な印象を発見し、

伝わるメッセージを確認する。制作者は作り手であると同時に作品を最初に見る人である。制作中においては主客が混合するため、作品が表すものが限定されず広がりのある表現が生まれる。この特徴は、低学年の子どもの成長（思いと行動を結びつける表現）に合わせた題材を考える上で、有効に作用すると考えられた。

（３）平成 26 年度は、小学校 5，6 年生（高学年）を対象とした抽象表現題材の研究調査を行った。高学年児童の多くは小学校で 5，6 年間過ごしており、学校環境に慣れ、学内での人間関係を既に構築し、校内に異質な他者を発見する機会も少ない。一方で、中学校や社会へ一歩を踏みだす準備段階でもあり、自己を形作っていく上でより多様な他者を意識できる学びが期待される。「抽象表現」は、特定の地域や文化の象徴的な意味や記号理解を前提とせず、世界の多様な文化交流の中で、新しい形を生み出しその価値を発見していく造形プロセスを持つ。そのため、異質な価値観を包含したり、自分を超える他者理解の方法として表現を深めていくことが可能である。具体的には、「抽象表現」題材を扱った海外の小学校実践事例を収集し、その中で特に分かりやすく小学校でも実践可能な事例を抽出し、教師に紹介した。海外教育機関での「抽象表現」の実践事例を子どもたちに見せ比較させることは、人が道具や材料を使い造形することの共通性、造形上の工夫に見られる制作者のコンセプトの理解につながる。高学年の発達段階を考慮し、多様な他者＝異なる文化的背景を持つ海外の子どもたちとの学びに着想を得、アメリカ（ニューヨーク）の小学校とインド（デリー、グルガゴン）の小学校で授業実践を取材し、日本の小学校でも実践可能な事例を抽出した。特に、造形上の工夫に見られる制作者のコンセプトが理解される教材の開発を検討した。

平成 27 年度インドの私立学校 6 年生と附属小学校 6 年生とが同じテーマで絵を描き、テレビ通話システムを用いて相互に作品を鑑賞しあう授業を実践した。授業実践報告及び、インド視察でみた授業報告をまとめ雑誌で発表した。

また、抽象表現題材について、水彩絵の具による表現、形、あるいは色からイメージを想像し膨らませる題材を大学生造形初心者を対象とした造形表現テキストとして執筆した。（近日発行予定）

（４）平成 27 年度は、中学生を対象としたマルチメディアを用いた抽象表現題材を検討した。中学生は、身体的に様々な道具を使いこなすことができ、表現に対して挑戦する意欲を持っている。現代の多様なメディア表現への関心から自分の感性を発揮できるよう、コンピュータをはじめとするマルチメディア表現題材を検討した。「抽象表現」は、物を変容させ感性に応じて意味ある造形に作り上げるものである。ここでは、画面に形態が現出し、それらが移動・回転したり、色が変化するなど静止画面に「動き」を加えることで、物体が仮想空間に変容することに着目した「抽象表現」の実践が可能である。造形の「動き」と「インタラクティブ性(鑑賞者が動きを発動させること)」を中心に総合的な表現指導のための使用ソフト及び表現環境を吟味し、画面が物理的な面から動的な空間へと変容するダイナミズムをコンピュータを通して造形として実感できる題材開発を検討した。中学生の発達をふまえ、多様なメディア表現への関心から自分の感性を発揮できるよう中学校でタブレットＰＣを使用してもらい、美術科の題材を大阪府下中学校の教諭の協力のもと実践した。マルチメディアを用い表現素材（色）への関心を高める教材として「色彩ヘルパー」アプリを使用した。コンピュータを介してカメラ機能と色と言語を結びつける、光による色の変化をとらえる体験を表現の初歩的な授業実践ととらえ、活動を整理した。大阪府下公立中学校での実践例二つを研究室のホームページで公開し、広く図画工作・美術の教育に携わる人が自由に見ることのできるようにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①<u>渡邉美香</u>　狩谷潤也、インドの学校視察及びインドと日本の小学校との絵画相互鑑賞学習の実践報告、教科教育学論集、第 15 号、2016、81－88、機関リポジトリのアドレス；http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/28801

②<u>渡邉美香</u>、現代美術の教育における「抽象表現」の扱い方に関する理論と実技指導方法（４）、美術科研究、第 30 号、2013、69－78、機関リポジトリのアドレス；http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/27762

〔学会発表〕（計 1 件）

①渡邉美香、ワークシートを活用した美術教育鑑賞プログラムについて－言語活動と鑑賞活動をつなぐワークシート開発－、大学美術教育学会、2012 年 10 月 21 日、大分大学（大分県・大分市）

〔その他〕

ホームページ等

美術教育平面領域研究室

http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~mwatanab/activites.html

６．研究組織

(1)研究代表者
渡邉　美香（WATANABE, Mika）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０５４９１００